日本水産の捕鯨基地
―一九四八～五一年―

横浜と捕鯨の関わりのなかで、一九五〇年前後、横浜港が日本水産株式会社の南氷洋（南極海）捕鯨基地であったことは、あまり知られていない。そこで、当時の新聞記事を中心にこれらについて紹介しよう。

日本の南氷洋捕鯨は、一九三四（昭和九）年、日本捕鯨株式会社一船団から始まったが、直ぐに沿岸捕鯨を超える規模となり、三八年には日本水産・大洋捕鯨・極洋捕鯨の計六船団となり、四〇年には一万頭に迫る捕獲高となった。鯨は捕鯨母船上で解体・加工され、主に鯨油を生産し、第二次大戦前は直接ヨーロッパ市場へ販売された。

横浜との関わりでは、一九三九（昭和一四）年六月、大洋捕鯨が神奈川区高島通に横浜事務所を設置し、三九・四〇年には第一日新丸・第二日新丸船団が横浜港から出港している。三九年には、一〇月二八日、伊勢山皇大神宮において大漁祈願し、ホテル・ニューグランドで壮行会を行っている。三一日の出発前には、母船上で社長以下幹部による激励があり、出港時は、乗組員家族五百名余・会社幹部などが、数隻のランチに分乗して港外まで見送り、戦時期に「近来にない華やかな船出だった」ようである（横貿一一・一）。

この時期には、南氷洋捕鯨のほかに、北洋（太平洋北部）における捕鯨も始まったが、太平洋戦争により南氷洋・北洋ともに中止となった。

捕鯨の再開

一九四五（昭和二〇）年、アメリカ等の占領によって船舶の航行が禁止されたが、暫くして食糧難解決のために、限定的な範囲における漁業が認められた。捕鯨は、先ず、近海・小笠原諸島周辺が四五年中に許可された。

南氷洋捕鯨は、GHQが翌四六年八月六日付で許可し、日本水産一船団、大洋漁業一船団により再開されることとなった。早くから捕鯨再開に備えていた大洋漁業に対し、日本水産は消極的であったが、戦争中に消失した捕鯨母船に替わり、被弾し大阪港に係留されていた油槽船橋立丸を母船に改造し、捕鯨船の新造も行って船団を整えた。

日本の南氷洋捕鯨再開には、イギリス・ノルウエー等の捕鯨国が反対したが、GHQは「食糧危機を打開するための緊急措置」、「国際捕鯨協定を厳守するやう指令も発してゐる」、「日本の南極洋捕鯨企業の再開と見ることはできない」と臨時的措置であることを表明していた（朝日四六・八・二四）。この問題は、米国と反対国との折衝によって、捕鯨協定遵守を監視するための監督官の乗船などの条件により、一応の決着を見た（同九・九）。出漁直前の記事では、GHQ天然資源局のウイリアム・テリー大尉とデビッド・マックラケン少尉が同乗することになったと伝えている（同一一・一〇）。

同年一一月、日本水産橋立丸船団は大阪港から出港し、大洋漁業日新丸船団は長崎港から出港し、南氷洋に向かい、一二月から捕鯨を開始した。翌年二月一一日には、帰国第一船として、大洋漁業の第三十二播州丸が四〇〇トンの鯨肉を積んで東京築地市場の岸壁に到着し、東京・横浜に一人当たり三〇匁（一一二・五グラム）、価格二円二五銭で配給されると報じられた（朝日四七・二・一二）。三月下旬には橋立丸が門司港へ、四月には日新丸が下関港へ帰港し、再開した南氷洋捕鯨の初年度は終了した。

一九四七―四八年捕鯨と横浜

一九四七年度も、四六年度と同様に捕鯨国からの反対があったが、GHQが押し切り、日本の南氷洋捕鯨は続けられた。一一月六日、大洋漁業の日新丸船団は、横須賀長浦港から、日本水産の橋立丸船団は大阪港から南氷洋へ向かった（朝日一一・七）。

翌四八年一月二〇日、前年同様、大洋漁業の第三十二播州丸が鯨肉四五〇トンを積み帰国し、横浜港外に仮碇泊、検疫後、築地市場へ向かった。運んできた鯨肉の大半は、北海道方面と山梨・群馬方面に向けられると報じられている（朝日一・二一）。

三月になると、第五山水丸（極洋捕鯨、両船団に所属）が、鯨肉一二〇〇トン、鯨油五〇〇〇トンを積んで横浜港に入港し、大きな歓迎を受けている。同船は、二四日午前一一時半頃、神奈川区の中央卸売市場岸壁に到着した。岸壁では、市長・知事・農林水産局関係者・市場荷受業者・市場吏員や乗組員家族、市内の小学校を代表して幸ヶ谷小学校五・六年生四〇〇人などが待ち受け、ブラスバンドの演奏と小旗を振って歓迎した。船長が下船すると、幸ヶ谷小六年女子児童が代表して花束を贈呈した。午後からは岡本敦郎・渡辺はま子などを招いた歓迎会を開催している。また、市では入浴券・オデヲン座入場券・市電全線パスを贈っている（神奈川三・二五）。この第五山水丸が持ち帰った鯨肉のうち、二四五トンは県内に配給予定で、横浜・川崎・横須賀の三市が一人当たり二〇匁（七五グラム）、その他は四〇匁であった（同）。二七日には、中央卸売市場の会議室に、県・市・経済安定本部関係者、場内業者約一五〇人を招いて鯨肉試食会が行われ、ベーコン・ビフテキ・ソーセージなどの料理を試食した（神奈川三・二八）。四月二二日には第五山水丸の映画試写会が行われている（『昭和二十三年横浜市事務報告書』）。映画「鯨船入港」は、市政宣伝映画として民生局文化課が担当し、横浜映画株式会社が制作した。映画は三五ミリ、約一〇分（四〇〇フィート）、費用一二〇、五〇〇円で、半額は関係の会社に分担してもらう見込みとされ

ている（四八年六月五日「定期監査報告書」、「横浜市会会議録（第十号）」五六～五七頁）。

このように捕鯨関係船の入港には、市を挙げての歓迎ぶりであった。

捕鯨基地を横浜へ

一九四七年度（四八年三月）の歓迎ぶりは、捕鯨基地誘致の一面があった。「基地誘致に横浜魚類株式会社が尽した功績は大きく、すでに昭和二十三年はじめからその運動はなされていた」（「捕鯨船団南氷洋へ」、『月刊よこはま』第一巻第七号、一九四九年一月）とあるように、四八年初頭より日本水産に近い横浜市中央卸売市場の荷受会社、横浜魚類が誘致に動いていた。また神奈川新聞でも「特に日水の横浜への基地移転は横浜が捕鯨基地として各種の条件に恵まれているとは言え地元の横浜市当局をはじめ、仲人役をかつて出た横浜魚類株式会社岡田社長、湯本専務等の熱意ある斡旋に負うところ大であつたことは特筆に値いする」（二三・一一・一二）と書かれている。この運動が功を奏し、「ようやく日水の気持ちが動きはじめたのが六月はじめ」（『月刊よこはま』同）で、二五日には、GHQから日本水産に対して横浜港使用の認可が出ている（神奈川六・二七）。日本水産が動いた大きな要因の一つには「日本一とうたわれる横浜水道」があった。但し、大洋漁業の横須賀長浦港が「昨年から永年の捕鯨基地ときめて加工設備、倉庫など社自体で着々施設をしている」のに対し、日本水産は中央卸売市場内に「捕鯨事業本部横浜出張所」を九月に開設したが、横浜港は「日水が一時的にきめたもので、今年の成績如何で来年は他港に移るかも知れない」という不安定なものであった（神奈川一〇・二一、一一・一二）。

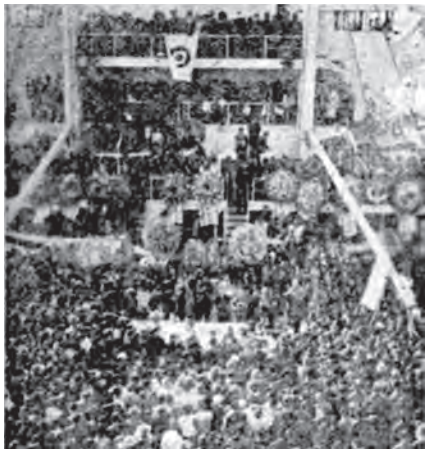
このように捕鯨基地となったが、周辺の商人の関心は薄いと言われた。先の『月刊よこはま』では、従来の日本水産出入りの大阪・東京等の商人の「隠然たる勢力」が続いていて、横浜商人は簡単に参入出来なかったが、横浜側でも「好機を完全に見送つたのであり、一部の人をのぞいてむしろほとんど努力しなかつたといつてよく」、「のろまな横浜商人」と評されている。その中で青果物は、中央卸売市場の荷受会社など地元商人が六万貫余を販売し、その他、船具類のなかの若干を地元の商人が提供した（神奈川一〇・二一）。

一方で港湾施設は、高島町国営倉庫五号・六号が提供され、共立・三菱・日新の各倉庫も用意され、荷役では「犬猿の間柄にあつた」三菱倉庫・関東運輸が「もろはだぬいで一致協力したことは特筆すべき事柄」であったという。

一〇月二〇日未明、橋立丸は捕鯨基地となって初めて横浜港に入港、大桟橋に到着し出発に向けて積荷を始めた（神奈川一〇・二一）。

出発直前の翌一一月一一日には、横浜市は、野毛の国際劇場において、大々的な壮行会を開催している。壮行会は、石河京市市長、小沢二郎市会議長、第八軍ブランチャード中佐など関係者約一千人が出席して行われた。石河市長は、壮行の辞のなかで「たゞ港湾設備が復旧しておらぬため、十分な援助が出来なかつたことは非常に残念であつた」と述べており、先の物資調達も含めて、基地機能としては、未だ不充分であるとの認識であった（神奈川一一・一二）。

一三日正午、橋立丸は大桟橋を出港し、捕鯨船七隻、油槽船玉栄丸とともに南氷洋へ向かった（船団は大阪出港の摂津丸など計一三隻）。この日、見送りには約一万二千人が集まった。大桟橋接収後、日本人が入場を許可された最初だという。花火が打ち上がる中、船からは「五色のテープ」が投げられ、「戦前のメリケン波止場を思わせ再建日本の縮図であつた」と記事には書かれている（神奈川一一・一四）。



橋立丸船上の歓送会　1948年11月
（『月刊よこはま』第1巻第7号、横浜市中央図書館所蔵）

一二月中旬、漁場に到着した両船団は捕鯨を開始し、翌年二月一日、例年通り第一船として日新丸船団の第三十五播州丸が築地市場に到着、翌日には横浜市中央卸売市場に冷凍鯨肉約二〇トンが入荷、三日には三〇トンが入荷する予定と報じられた（神奈川四九・二・三）。次いで五日には橋立丸船団の相模丸が築地市場に到着し荷揚げをした後、八日に横浜市中央卸売市場岸壁に到着し、翌日には約九四トンの冷凍鯨肉を荷揚げし、横浜に約四一トンなどの分荷を行った（神奈川二・一〇）。

その後、捕鯨期間が終了し帰還の途についた橋立丸は、捕鯨船七隻とともに四月二三日横浜港に帰港した。橋立丸は、検疫を終えると川崎港に直航し、鯨油などを荷揚げし、二五日、再び、横浜港へ向かい、高島桟橋に着岸した。岸壁では、乗組員家族や「南氷洋捕鯨の歌」をブラスバンド演奏で歌う小学生などに迎えられ、船上で行われた歓迎式では、GHQ天然資源局長や同水産部長、農林次官、知事、市長などが歓迎の辞を述べている。橋立丸は、二七日に鯨肉・鯨油を積んで大阪に出港するまで、船内の公開を行い、二六日には小学生一〇〇〇人が見学する予定であった（神奈川四・二六）。

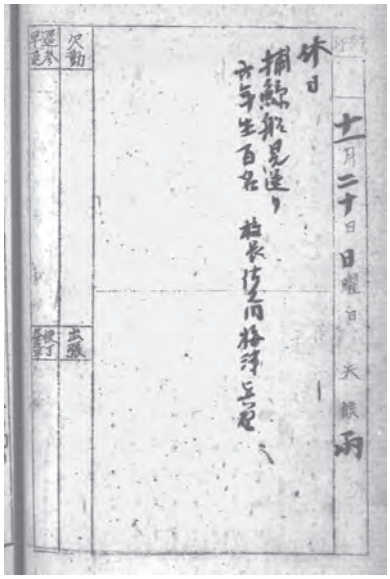
また、折しも開催中であった日本貿易博覧会会場でも歓迎会が行われた。二六日午前一一時から神奈川会場の鉄塔下において、乗組員・家族など約一

千人を招待した。午後には、芸能人による歌謡大会も行われた。合わせて博覧会会場では、中央卸売市場が料理法付の冷凍鯨肉一〇〇匁を先着一千人に配っている（神奈川四・二七）。

横浜港から去る

一九四九年度も橋立丸船団は横浜港を基地とし、一一月二〇日、GHQ天然資源局ステンク中佐などを来賓として壮行会が開かれ、乗組員家族や小学生の小旗に見送られて出港した。捕鯨期間中は、例年のように両船団とも仲積船が鯨肉を積んで帰国した。しかし、食糧事情の改善、統制の廃止などにより、鯨肉を取り巻く環境は変わってきていた。船団が南氷洋に出漁していた「この半年の間に国内の経済情勢は一変して」、「折角はるばるお越し願つた南氷洋のクジラ君も昨年、一昨年のようには歓迎されそうもない」と言われ、豚肉・牛肉の統制廃止による価格下落により鯨肉は消費されなくなってきていた。大洋漁業では直売の鯨専門店を設けて販売を計画し、また、大洋・日本水産ともに缶詰生産を申請中であると報じられている（神奈川四・七）。もっとも、これ以後も捕鯨は拡大していくので、学校給食など多様なルートが開拓されたのであろう。

一方、横浜市では、捕鯨船歓送迎の方法が見直されている。これまでの式典は、一部を除いて関心が薄く、捕鯨事業の意義が徹底されていないので、全市民が捕鯨従業員に対する感謝の意を表するような行事に変更することにした（神奈川五〇・四・一一）。そのため、式典は会社に委ね、市は商店街に歓迎旗、主要道路には横断幕をかかげ、乗組員全員に記念品などを贈る、各組合の協力を得て旅館・飲食店・映画館などは一割引とするなど、「実質的な歓迎方法」をとることにした。五〇年度は、出漁前の入港期間中、市内商店街と共同し捕鯨船団サービス週間としてサービス券を配布し、各商店街の「捕鯨船団歓送迎の店」に提示すれば、商品の割引等のサービスを実施することになった（神奈川一〇・二五）。もっとも、出港当日は、橋立丸船上で壮行会が行われ、農林大臣・市長など祝辞があり、乗組員家族らによる見送りは盛大に行われた（神奈川一〇・三〇）。翌年四月帰港時にも盛大な式典が、船上で行われている（神奈川五一・四・一二）。



捕鯨船歓送の「学校日誌」記事
1949年（元街小学校資料Aa-23）

ところで、この頃になると物資の調達についても改善されてきていた。五〇年三月には、外航船舶の船具取扱専門業者がいないとして、市と日本水産、市内有力商社などによる懇談会を開いて、専門業者の復興に努めたいとしている（『横浜弘報』第五号）。また、横浜市が斡旋してきた食糧と船用雑貨は、「横浜市内の業者の誠意が認められ、その応需の実力は別として、好成績をあげたので、来春はさらに業界陣を整備、引き続いて市が斡旋を行うことになつた」と報じられている（神奈川五〇・一〇・二〇）。また、五一年二月には、日本水産は鶴見冷蔵株式会社を設立しており、少しずつではあるが、基地として根付いてきたといえよう。

しかし、翌一九五一年度は横浜港からの出航にはならなかった。日本水産は、前年までの捕鯨母船橋立丸を飯野海運に売却、替わりにトラック島で空襲をうけ沈んでいた第三図南丸を引き上げ、日本に曳航、修理して図南丸として新たな母船とした。このための修理が、兵庫県の播磨造船所相生工場で行われ、これに時間がかかったために大阪出港となった。「帰港は前船団が来春基地横浜港に帰る予定」と書かれているように、一時的な措置だと考えられていた（神奈川五一・一一・一）。しかし、横浜帰港の記事はなく、翌年度以降も大阪からの出港となった（一九五五年度まで、以後、神戸港）。

おわりに

日本水産の捕鯨基地は数年で終わったが、横浜港と捕鯨の関係は続いた。一九五二（昭和二七）年、講和条約発効後、北洋捕鯨が一船団で許可され、日本水産・大洋漁業・極洋捕鯨が共同して、極洋のばいかる丸を母船とした一三隻の船団を形成した。ばいかる丸は七月一〇日、山内桟橋を出航、広川農相・塩見水産庁長官や乗組員家族などの見送りで「ごった返し」たという（神奈川五二・七・一一）。極洋捕鯨は、その後、五五（昭和三〇）年に横浜港を捕鯨基地と定め、北洋に南氷洋に出漁している。

一方、日本水産は、総合的な水産会社として横浜魚類株式会社の有力荷主あり、横浜との関係は続いている。

【参考文献】
『日本水産50年史』（一九六一年）、『日本水産の70年』（一九八一年）、『日本水産百年史』（二〇一一年）、『大洋漁業80年史』（一九六〇年）、徳山宣也編著『大洋漁業・捕鯨事業の歴史』（一九九二年）、『横浜市中央卸売市場三十年史』（一九六一年）、『横浜貿易新報』（→横貿）、『神奈川新聞』（→神奈川）、『朝日新聞（縮刷版）』（→朝日）等。
※一九四八年橋立丸の横浜出港、四七・四八年第三十二播州丸の築地市場到着は、「日本ニュース」に映像がある。NHK「戦争証言アーカイブス」（http//www.nhk.or.jp/shogenarchives/）で見ることができる。また、極洋捕鯨船団の一九五五年初入港は、「神奈川ニュース」に映像があり、DVD『映像でたどる昭和の横浜　第一巻』（横浜都市発展記念館）に集録されている。

（百瀬敏夫）